



さゆりっ子

No.8

文責 畠林一成

うん、いいんじゃない



「がんばれ〜!」年長さんはいったい何に向かって声援を送っているのでしょうか。

この日はパワフルマンの日、みんなで登り棒に挑戦しました。自分の力で必死に登っていくお友だちの姿に自然と「すご〜い。」と感嘆する声と応援する声が交じり合っていました。

引き付けられるように見守る子どもたちの視線と笑顔。様々なことを一緒に経験し、かけがえのない仲間と言いたいくらいの気持ちの育ちを感じられる一コマ。こんな場面に出会えてうれしい限りです。

「うん、いいんじゃない」

あさ、おきられない めざましどけい
さむがりな ゆきだるま
むしがにがてな むしかご
はたらきものの なまけもの
ひとりになりたい いくら

あつまって
ひるねして
おやつをたべて
でたこたえ
いいんじゃない
いいんじゃない
うん、いいんじゃない
またね



よるねむれない まくらとふとん
こわがりな おばけ
あめがにがてな レインコート
みずたまがすきな しまうま
おしによわい ポタン

あつまって
わになって
たきびして
でたこたえ
いいんじゃない
いいんじゃない
うん、いいんじゃない



いいんじゃない
いいんじゃない
うん、いいんじゃない
またね

「おかあさんといっしょ」11月の歌は「うん、いいんじゃない」。毎朝、登園する時間に流れるので、孫と一緒に口ずさんでいるが、リズムカルなテンポで覚えやすい。

「歌詞は？」というとちゃんと今の子ども向けのメッセージになっている。

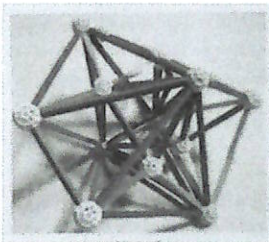
「朝。起きられない目覚まし時計なんて、だめじゃない。役に立たないよ。」

「水玉のシマウマも変だよ。」と「こうあるべきである」という概念に固執すると、ものとりえ方も狭くなってしまいます。

「へ～。それもありません。」多面的な見方をすれば、「いてくれてうれしい。」「他にいいところあるもんね。」だから「いいんじゃない。」と最後は肯定的に受け止めてくれています。

『通常学級 子どもと子どもがつながる教室 ～特別支援教育 ONE テーマブック～』田中博司著では、小学校における「子どもたちの関係づくり」について興味深く書かれています。

従来から提案されてきました「できる・わかる」ための子どもへのアプローチ（いわゆるユニバーサルデザイン）は個々への配慮には有効であるが、学級経営で一番問題化している「できる、できないよりも学級での自分の立ち位置に悩んでいる子」への支援は「学びを成立させるための」学級の基盤づくりになる。そのためには「個」と「個」のつながりである「関係」をどのように育てていくかが、大きくかわってくる。



左のモデルのように、規則正しくなくとも、ゆるやかでも必ずつながっている。そして全体の構成要素のひとつとなっていることをめざしたい。特別支援教育の対象は、支援を必要とする子どもだけではなく、これからの社会を築くすべての子どもたちである。

筆者は「ゆるやかでも、必ずつながっている」とは「自分らしさをベースにする。それぞれの子どもたちの自分らしさを尊重できること。うまくつながれないことだってある。必要な時にはつながり合える関係であればいい。ひとりで過ごすことが、普通に感じられる教室であってほしい。長縄のようなつながり 長くてやわらかい関係である」と説明しています。

「うん、いいんじゃない」がうたっている「他者の受け止め」と相通じるところがあると思います。

本園の「主体性を大切にしていく」保育でも「関係づくり」の基盤はしっかりと築かれてきています。一人ひとりの不安をみんなで支え合える学級に、教室を「自分らしさ」でつながり合えるところになりたいという思いは子どもたちの前に立つ者の共通の願いであると思います。

かくれんぼ（11／14）

「おかあさんといっしょ」のファンターネでかくれんぼをしていた。おなじみのみもも、やころ、ルチータ、あーぷんが隠れたり、鬼になったりしているが、みももと一緒に隠れていたあーぷんがみももが見つかってしまうとあーぷんは見つからないのに一緒に出てきてしまったり、鬼が近くに来るとあーぷんは自分から出てきてしまったりとなかなかかくれんぼにならない。やころたちは「あーぷんは一人でいると寂しいんだよ。」とまだ言葉の出ないあーぷんの気持ちを察してくれた。

幼稚園でも末満さんが集団遊びをやり始め、だるまさんがころんだ、かくれんぼを紹介していた。先生が鬼になって隠れたり、みんなで先生を見つけたりして楽しんでいたが、一人ずつになったらあーぷんみたいな気持ちになる子もあるのかなと想像すると楽しくなった。

ちなみにあーぷんは鬼になるとものすごく見つけるのが早く、大活躍であった。やころたちも楽しそうに一生懸命隠れていた。

